

## 私の推薦する図書

### 読書のススメ - 古典から学ぶ -

経済学部長 栗原 裕

学部学生時代には本を読む機会が多くあったが、大学院時代には、研究分野以外の本を読むことはほとんどなかった。しかし、年月が経過するにつれ、専門分野のみならず、専門外の分野の書物から啓発されることが度々ある。

経済学の分野に限らないが、研究の高度化は、専門化、細分化の方向に進んでいるのは否めない事実である。それは、否定すべきことではなく、利点もあるけれども、視野、視点を広く持ち、透徹した考察、洞察力をもって、獲得した専門的知を本来あるべき人間的知に高める努力をすることは、大学人にとっての務めである。国際化、複雑化、そして多様化する世の中は、特にこうした視座と姿勢を求めている。

お勧めしたいのは古典である。普通の講義はもちろん、私が専門とする分野に関して読む文献は高度にテクニカルな論文や書物が中心である。現実の社会と古典とは乖離したイメージがあるかもしれない。けれども、古典という情報は皆に平等に提供されており、思索の素となる要素が多分に含まれている。時には少し下がって、謙虚に、素直に古典と対峙することによって、鳥瞰的に物事を見る習慣が醸成され、ひいては、人格と見識の形成につながることになる。古典を前にして自己を振り返ると、心もとなく、かつ恥ずかしく感じるが、古人に倣い、よりよく生きるための知性を高める情熱だけは一生失いたくない気持ちになる。そして、古典から現実の世界に戻ったときに正しく普遍的な判断、行動ができるような“人柄に支えられた知”が培われるであろう。

若い世代にぜひ読んでもらいたい本を何冊

かあげようと思ったが、どうしても数十冊になってしまう。そこで今年の夏休みに再読した本のうち、比較的若い世代に読まれやすい、経済関係以外の書物をあげることにしよう。

カント『道徳形而上学原論』

シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』

鈴木大拙『東洋的な見方』

道元『正法眼蔵』

\* \* \* \* \*

### 小坂井 澄著『人間の分際』

国際コミュニケーション学部長 田本 健一

2008年夏のある日、筆者の大先輩である、秋田聖霊女子短期大学副学長佐藤栄悦先生から封書が届いた。手紙には、先生ご推薦の著書が数点、解説とともに記されていた。

そのうち、先ず筆者の目を惹いたのは、『人間の分際』と題した書物であった。これは、岩下壮一神父(1889・9・18～1940・12・3)の一生涯を綴ったものであり、彼が何故名誉も財産も捨ててハンセン病者の友となつたのが書き連ねたものである。

本著では、また、哲学的、思想史的、宗教学的、西洋言語・文化論的、そして日本近・現代史的観点のいずれにも関わる記述が網目のように展開されている。フランス語、英語、ドイツ語、ラテン語に長け、大学では哲学を専攻し、宗教においても常に思索を重ね、フランス、イギリス、イタリアと3年間に亘る留学の末、遂には神父に叙階された岩下壮一を論ずるには、そのような広範な視野から記述されなければならないのであろう。その道の全くの素人である筆者が、受け身とはいえ、宗教的、哲学的、思想史的思考のまねごとは

できた。得るものは大きかった。

ところで、本書の題名となっている「人間の分際」とは、神父岩下壯一が後年よく口にした言葉であったという。「分際を知れ」とか、「分際をわきまえているか？」といった言い方をしたという。これは、現代の若い人たちにとっては、死語のようなものであろうか。日本語独特のニュアンスを持つ語であり、“単に身分を言いあらわすだけでなく、そこには蔑視、あるいは卑下の意識や感情が込められている”と著者小坂井澄は解説する。ある篤信の老人の回想を紹介して、本稿を終えることとする。“分際ということ、非常に重んじておられましたね。ですから、わたしのような下の者が、ちょっとでも差し出がましいことを言うと、むっとされた。ふだんは冗談話で人を笑わせて、親しみやすい方でしたが、そういうときは、ひやりとするような鋭さを感じたものです。”

\* \* \* \* \*

アレクシ・ド・トクヴィル著 松本礼二訳  
『アメリカのデモクラシー』

(岩波文庫、全2巻4分冊)

法学部長 田中 正人

著者トクヴィルは、フランス革命によって没落した貴族の末裔である。1831年に内務大臣からアメリカにおける行刑制度視察の命を受け、9ヶ月にわたり当時の全米24州を精力的に見て回り、帰国後さらにイギリス視察を行った後に本書を執筆した。

当時のアメリカは、イギリスからの独立を勝ち取り、合衆国憲法を制定してから40余年後、南北戦争という内戦を経験することとなったとはいえ、独立革命後、いわば「更地」に人工的に自由と平等の民主国家を建設しつつあった。

他方、著者の母国フランスは、革命によっていったん王政が打倒されはしたものの、「暴走」からナポレオン帝政へ、さらに正統王朝派

による復古王政を経て、1830年の七月革命でより自由主義的な七月王政を迎えるという、歴史の重みゆえの変転を経験していた。

トクヴィルは、平等主義の悪弊として同質化が進行し、多様性が失われ、「多数者の専制」をもたらす危険性を指摘し、宗教がアメリカという民主国家の「道徳的紐帯」となっていると観察し、「民主的な諸国において、個人の独立の範囲が貴族制の国々と同じように大きいと期待してはならない」と警告し、「アメリカにアメリカ以上のものを見た」。

アメリカ民主政の実態と民主政の本質についてのフランス貴族による省察たるこの古典。200年近くを経た今、日本の若い学生諸君がこれを読むことは、時空間を超える知的遊戯の類に属するかもしれない。かつて私が学生だった頃は、井伊玄太郎による迷訳(現在は『アメリカの民主政治』講談社現代文庫)以外には、今回の岩波版と同じ松本氏と岩永健吉郎との共訳(抄訳)しかなかったが、ようやくまともな全訳が出たこととなる。

\* \* \* \* \*

## "日本そしてアメリカ合衆国"

経営学部長 村松 幸廣

現代日本の変化はさまざま様相を呈している。格差のみならず、政治や組織のいたるところに見られる無責任体制は社会構造を蝕む状況にある。自己中と言われて久しいが、自己中心の傾向が、政治・経済・社会いたるところに見られる状況を看過できない。日本はどこに進もうとしているのであろうか。グローバル化、競争原理の導入による弊害は日本の良さを失わせている。

それは、戦後の急速な高度経済成長とバブルの経験に起因するものである。日本の発展は、欧米の後追いであり、なかならずアメリカのコピーである。高度成長期は人類の歴史の偉業であり、経済的な平等社会を短期的に